

# 球団拡張の可能性 と経済効果

近藤ゼミB班

## 調査に至った経緯

- 毎日野球をニュースで見るから
- グループに野球好きな人が多かったから
- 王貞治が球団拡張をすると発言しており興味を持ったから



大谷翔平（おおたにしょうへい）

ロサンゼルス・エンゼルス所属

生年月日 1994年 7月5日

身長193センチ 体重95キロ

花巻東高等学校卒

大谷翔平のような野球業界に変化が起きる  
→ 経済効果 

もし球団数が拡張されたらどのような経済効果  
が生まれるのか



© YOMIURI GIANTS



© Tokyo Yakult Swallows



© H.N.F.



© Rakuten Eagles



© YDB



© CHUNICHI DRAGONS



© S.L.



© Chiba Lotte Marines



© HANSHIN Tigers.



© HIROSHIMA TOYO CARP



©ORIX Buffaloes



© SoftBank HAWKS

# 球団拡張が実現した場合

- 地域のさらなる活性化
- プロ野球選手枠の増加
- 野球ファンの獲得
- プロ野球中継の増加

## 歴代でプロ野球経営に携わった企業

- 新聞社→**中日新聞**、**読売新聞**、国民新聞、毎日新聞、産経新聞、西日本新聞
- 電鉄→阪急、**阪神**、**西武**、南海、西鉄、名鉄、近鉄、国鉄、東急
- 映画→東映、大映、松竹
- 個人→有馬頼寧、高橋龍太郎、橋本三郎、横沢三郎など
- その他（身売りした企業）→大洋漁業、トンボ鉛筆、ダイエー、TBSなど
- その他（現在運営している企業）→ヤクルト、オリックス、ソフトバンクなど

## 最近の球団拡張の事情

- 古田敦也氏（元ヤクルト、野球評論家）が国内の複数自治体で球団拡張の議論が始まっていることを明かす(2020/4/4 TNCテレビ西日本の特別番組)
  - 2015年から静岡市、新潟市、松山市、沖縄県と協議
- オーナー会議でイースタンの新球団案(2022/9/21 日刊スポーツ)
  - 2軍のみ静岡市を本拠（清水庵原）に24年シーズンから参加
- オーナー会議で2軍の構造改革を検討(2022/11/8 デイリー)
  - 24年シーズンから二軍に新規参入する新球団公募の検討

# 球団拡張・新規参入の事例

年	球団名	スポンサーなど	本拠地など
1937⑦	後楽園イーグルス	後楽園球場	東京
1938⑧	南海軍	南海電気鉄道	大阪
1946⑥ 連盟再結成	セネターズ	横沢三郎、川口真一郎(再興)	東京
	ゴールドスター	橋本三郎 (再興)	奈良 (実際は東京)
1950(パリーグ) 既存4球団 阪急、南海 大映、東急	毎日オリオンズ	毎日新聞	東京
	西鉄クリッパーズ	西日本鉄道	福岡 (ほぼ開催されていない)
	近鉄パールス	近畿日本鉄道	大阪
1950(セリーグ) 既存4球団 巨人、中日 大阪 (阪神) 松竹 (大陽)	大洋ホエールズ	大洋漁業 (まるは)	山口 (ほぼ開催されていない)
	西日本パイレーツ	西日本新聞	福岡(ほぼ開催されていない)
	広島カープ	中国新聞社、広島市、呉市など	広島 (ほぼ開催されていない)
	国鉄スワローズ	交通協力会、鉄道弘済会など	東京
1954(パ)⑦	高橋ユニオンズ	高橋龍太郎	神奈川
2005(パ)⑤	東北楽天ゴールデンイーグルス	楽天グループ	宮城

※○数字は前年の球団数、赤字は現存する球団、黒字は現存しない球団、太字は経営母体、本拠地が変わっていない球団

※スポンサーの斜体は社会人野球チームを有していた球団、本拠地の斜体は現在本拠地が変わっている球団

※日本プロ野球「経営」全史 球団オーナー55社の興亡 (中川右介著 日本実業出版社 2021) などより作成

# 参入を考えたor 勧誘された企業

1947：国民野球連盟＝新興＆中小企業、1年で解散

- 塩野義製薬、川崎いすゞ、八幡製鉄、吉本興業、大洋漁業など

1950：2リーグ分立＝8球団→15球団

- 朝日新聞、**名鉄**、松坂屋、日本生命、別府星野組、小田急など
- 朝日レッドソックス：朝日新聞と名鉄の共同経営、名古屋拠点
- 山陽クラウンズ：山陽電気鉄道、独立二軍球団、3年で解散

1954：パリーグ第8球団誕生＝個人経営の球団

- トヨタ自動車、塩野義製薬、朝日麦酒、大日本製糖



# 結果①：1946年の個人スポンサー球団

- 成績は低迷、数年で企業に売却

セネターズ：横沢三郎、川口真一郎、小林次男らが中心、東京セネターズの再興

→人気者大下弘らを擁したがチーム成績は低迷

→資金操りに苦しみ、最終的に東急に売却

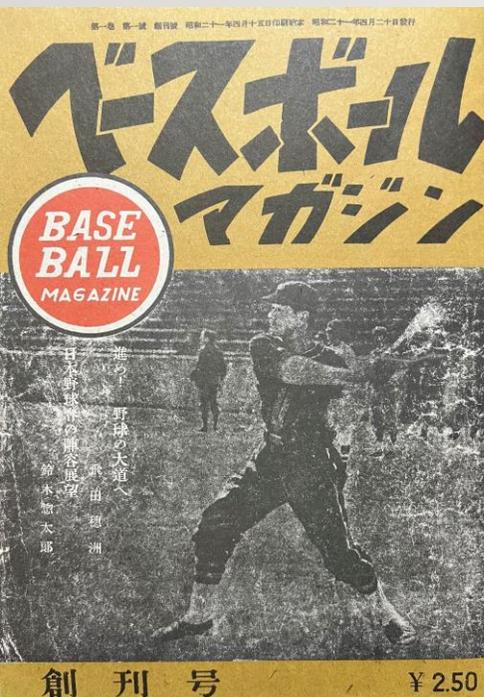
ゴールドスター：橋本三郎と旧朝日軍の選手達为中心、朝日軍の再興

→奈良県御所町（現御所市）にある田村駒（スポンサー）の系列工場

→素人紛いの選手もあり成績は低迷

→経営難のため、2度売却、最終的に大映に売却

**個人スポンサーの球団は経営を維持できない**



## 結果②：1950年の2リーグ分立



- 選手を多く引き抜いた毎日は優勝、他は下位に沈んだ
- 野球協約が発効前のため、混乱が生じた（主に選手の移籍）
  - GHQが問題視、翌年に野球協約が発効、西日本問題にも介入
- **選手の数が増えすぎたため全体のレベルが低下、格差を招く**
  - この年のセリーグの首位と最下位のゲーム差は59.0（歴代2位）
- 地域フランチャイズ制がないため、主催地域に偏りが生じた（1952年～）
  - 特に西日本は74泊75日遠征、本拠地・福岡での開催は6月4日が最後
- 西日本は1年で西鉄と合併（セ脱退）、大洋と広島の合併案が浮上と1年でリーグは縮小

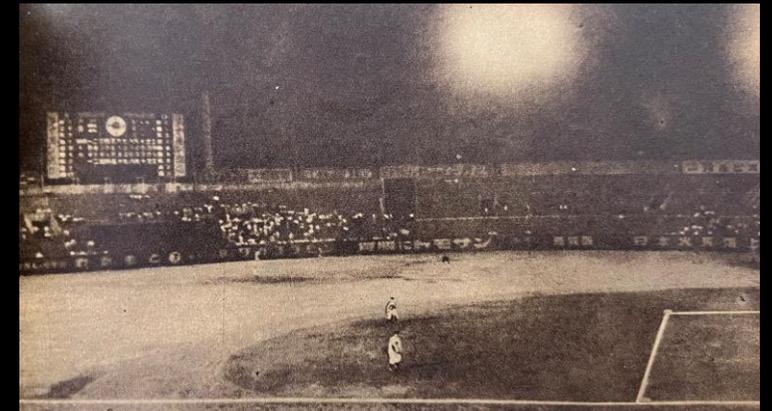
# 1950年シーズンの順位表

セントラルリーグ順位表							パシフィックリーグ順位表					
順位	チーム	勝利	敗戦	引分	勝率	差	チーム	勝利	敗戦	引分	勝率	差
1位	松竹	98	35	4	.737	---	<b>毎日</b>	<b>81</b>	<b>34</b>	<b>5</b>	<b>.704</b>	---
2位	中日	89	44	4	.669	9.0	南海	66	49	5	.574	15.0
3位	巨人	82	54	4	.603	17.5	大映	62	54	4	.534	19.5
4位	大阪	70	67	3	.511	30.0	阪急	54	64	2	.458	28.5
5位	大洋	69	68	3	.504	31.0	西鉄	51	67	2	.432	31.5
6位	西日本	50	83	3	.376	48.0	東急	51	69	0	.425	32.5
7位	国鉄	42	94	2	.309	57.5	近鉄	44	72	4	.379	37.5
8位	広島	41	96	2	.299	59.0	※赤字は新球団、太字が日本一					

※首位と最下位のゲーム差(2022)：セ = 14、パ = 16.5

※首位の勝率(2022)：セ = .576、パ = .539 最下位の勝率(2022)：セ = .468、パ.421

# 西日本パイレーツ都道府県別試合数



試合数

42

1

29都道府県52球場（全136試合）

東京（後楽園）：42試合

兵庫（甲子園）：17試合

愛知（中日など）：15試合

福岡（平和台など）：7試合

74泊75日：7/28～10/10

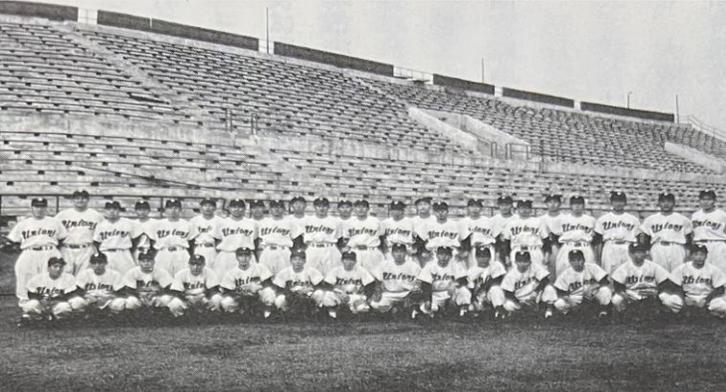
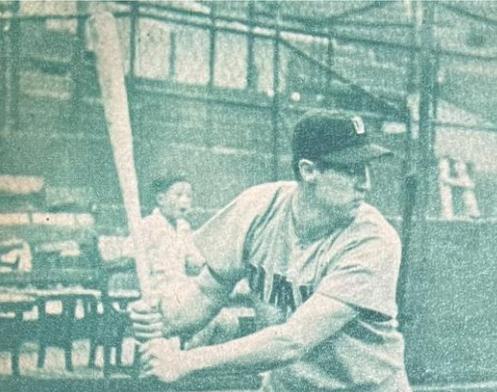
→16都道府県22球場37試合

→この前後に43日と37日の遠征

消えた球団 1950年の西日本パイレーツ（塩田芳久著 ビジネス社 2021）などより作成

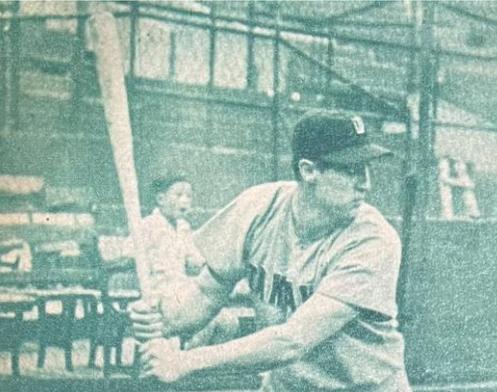
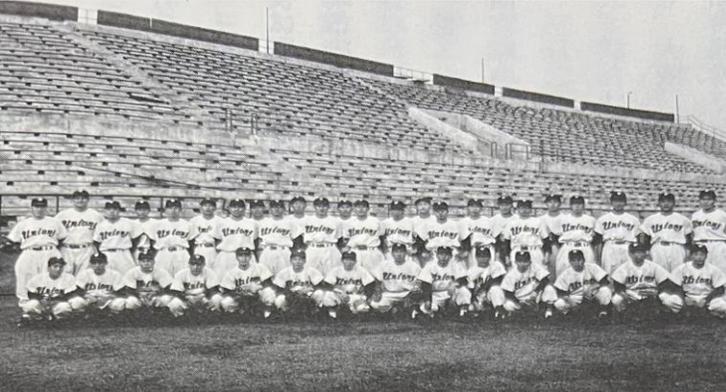
## 結果③：高橋ユニオンズ

- 1年目は6位、以降最下位に沈む
  - 1955年は勝率.300で低勝率罰金制度に該当（パのみ、.350未満、2例目）
- 寄せ集めでチーム力がない&観客動員数も低迷
- 資金不足と経営不振のため、大型新人選手をとることができない
  - 1955年シーズンは無名選手を大量獲得（質より量）
  - 1956年シーズンは大型選手を数人獲得（量より質）
- 上記の理由などで3年で解散（1957年シーズン前に大映に吸収合併される）

高橋ユニオンズの成績						1954年の選手内訳		1955年新人選手		1956年新人選手					
年度	順	勝利	敗戦	引分	勝率	前所属	人数	選手名	出身校	選手名	出身校				
1954	⑥	53	84	3	.387	南海	4人	川田幸夫	足利工	佐々木信也	慶大				
1955	⑧	42	98	1	.300	阪急	3人	小沢文夫	愛知大	望月勝	巨摩高				
1956	⑧	52	98	4	.351	大映	2人	大庭宏	佐世保北高	荒川宗一	早大				
収入と支出			金額			西鉄	2人	長谷川宏司	神奈川商工	倉橋孝治	不明				
営業収入			12,486,959円			毎日	8人	石崎正勝	岡山工	※校名は当時のもの ※太字は社会人経由で入団 ※黄色は甲子園出場者、下線は1年で退団					
雑収入			16,914,454円			東急	1人	森大和	松陰高						
総務費			3,646,719円			近鉄	2人	柴原光三	宇都宮学園高						
技術費			5,583,599円			セリーグ	1人	三橋孝明	国学院高						
臨時費			5,582,103円			新入団	21人	青木惇	相洋高						
収支：▲3,541,108円						球界復帰	1人	原田康明	愛知大						
※現在の貨幣価値の約1/2						合計	45人	功刀義幸	巨摩高						
												板野強	関西高		
												見乗敏茂	八幡北高		
												市川治彦	甲府商		
												加藤卓	松山経専		
						他に茂木武夫など全20人									
						※1957年の新人選手は4人									

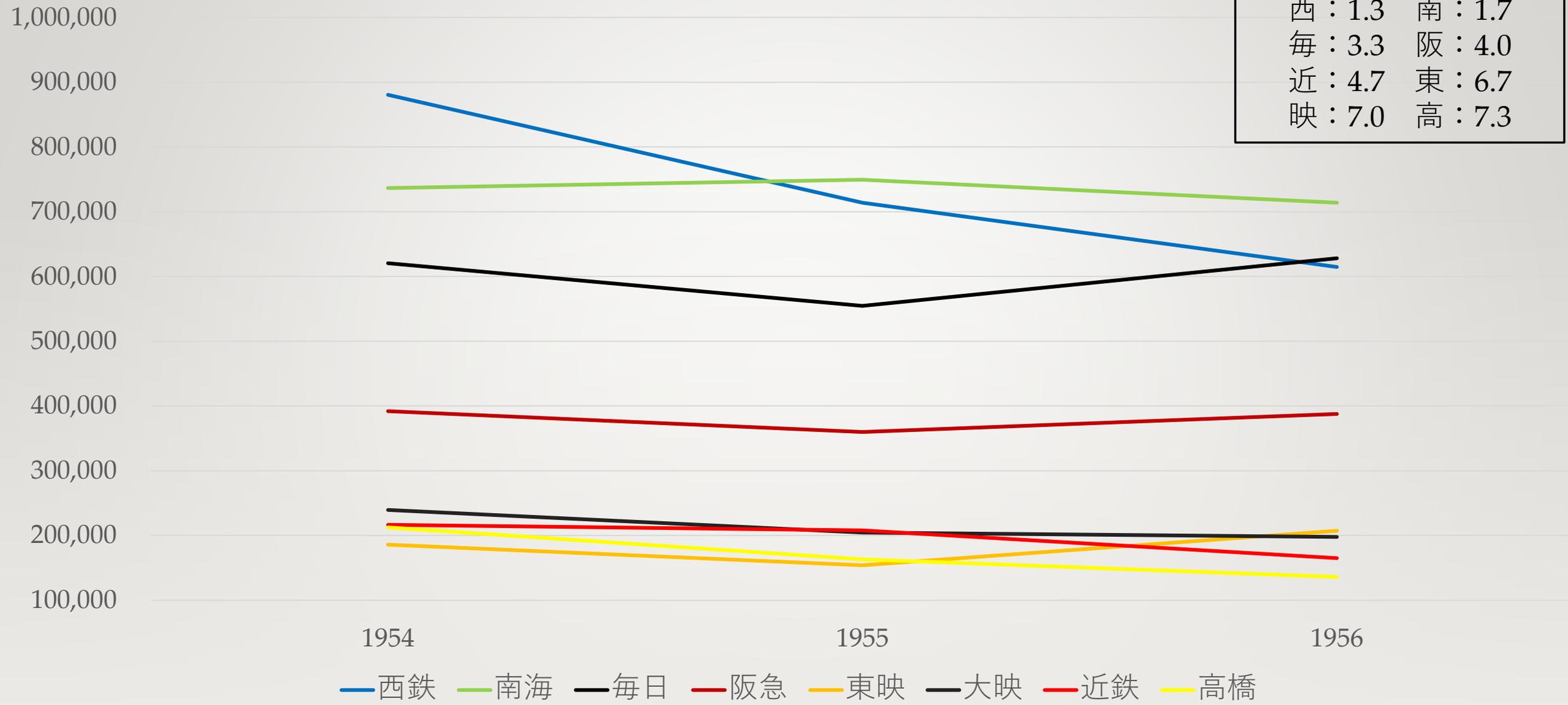


左：荒川宗一、右：佐々木信也



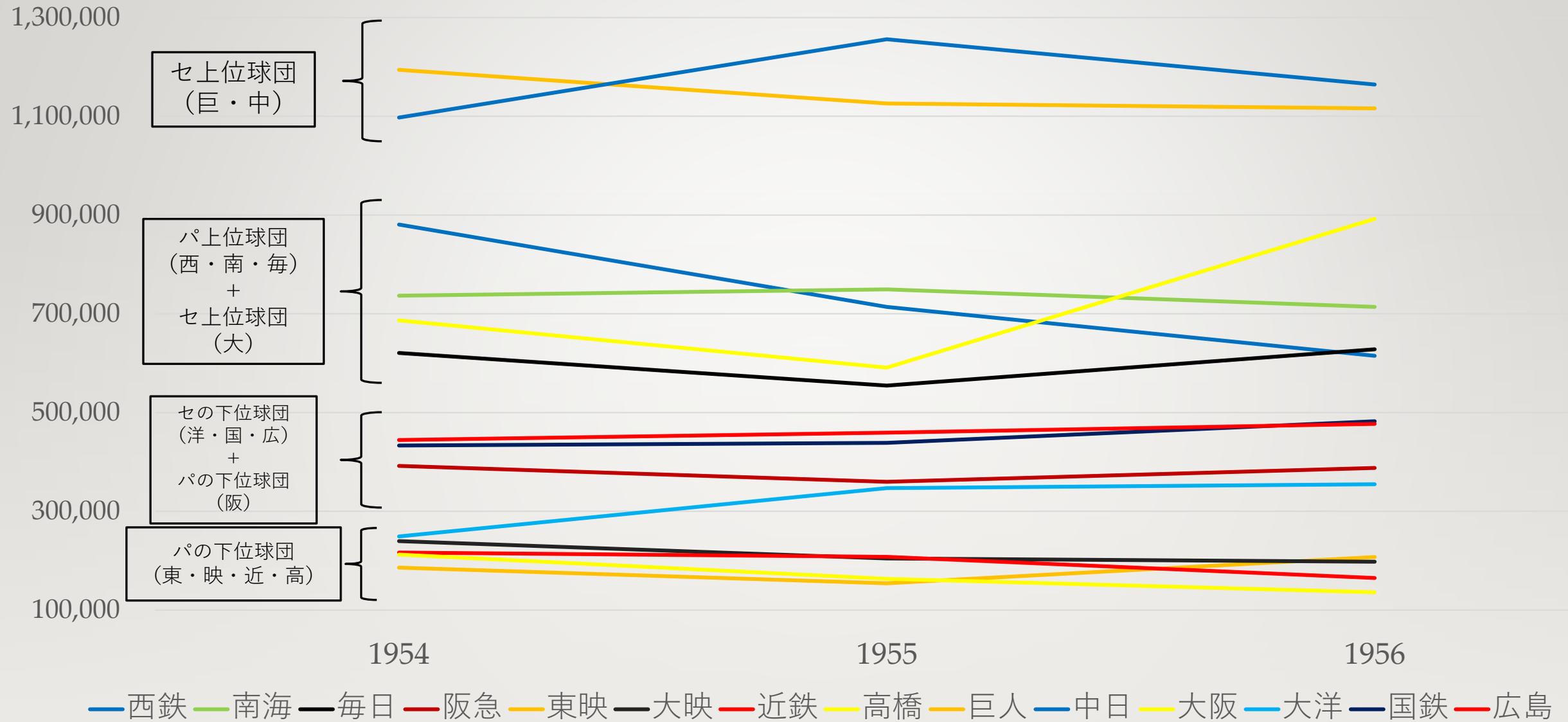
# パリーグ年度別入場者数(1954~1956)

パ(54~56)平均順位	
西：1.3	南：1.7
毎：3.3	阪：4.0
近：4.7	東：6.7
映：7.0	高：7.3



※1955年の高橋の球団名はトンボ

両リーグ年度別入場者数(1954~1956)



※1954年の大洋の球団名は洋松（大洋松竹ロビンス）、1955年の高橋の球団名はトンボ

※日本プロ野球「経営」全史 球団オーナー55社の興亡（中川右介著 日本実業出版社 2021）より作成

# 歴史の結果からの共通点とまとめ

- 新規参入した球団の黎明期は下位に沈む傾向
  - 成績の低迷は集客の低迷に繋がるので戦力補強が非常に重要
    - 戦力補強に投資しないorできないと長期低迷する可能性（近鉄、国鉄など）
    - 経営に余裕がないと球団が消滅or身売りする可能性（西日本、高橋など）
  - 先の例はドラフト制がない時代 = 流動性 + 費用高い、戦力不均衡
    - ドラフト制後 = 流動性 + 費用低い、戦力均衡・・・事例がない
- 経営母体が変わってない球団（広島、楽天）の共通点は地域密着

**大企業 + 地域密着が現代の球団拡張の成功のカギを握る！**



# プロ野球球団を新設した場合 の経済に与える影響

# 分析内容

プロ野球球団設立がその地域にもたらす経済波及効果をホームゲーム開催による効果に限って推計する。

# 分析の前提

新設する球団の本拠地を実際にプロ野球球団誘致の議論されている新潟県新潟市とする。

使用する球場はここ数年でプロ野球公式戦が行われている「HARD・OFF ECOスタジアム新潟」とする。

入場料はプロ野球のチケット価格の平均とする。

日帰り客は県内客とする。交通費は、鉄道、バスを利用するとしてその平均値を使用する。宿泊客の交通費は東京、名古屋から出発、鉄道、バス、自家用車を利用するとしてその平均値を使用する。

宿泊費は新潟駅周辺地域のホテル10軒の平均値を使用する。

試合数：63試合(2022年度セントラルリーグのホーム試合数)

1試合の平均観客数：23,883 人 (2019年に開催されたプロ野球公式戦2試合の平均人数)

年間観客数：1,504,629人

宿泊率：15%(Jリーグの平均宿泊率が30%、広島が15%、楽天が5.2% 地理的要因を考慮して15%とする)

# 観客一人当たりの消費額(円)

	入場料等	交通費	飲食費	グッズ購入費	合計
日帰り客	2,500	1,900	2,100	1,000	7,500
	入場料	交通費	宿泊・飲食費	グッズ購入費	合計
宿泊客	2,500	20,002	9,995	4,000	36,497

ホームゲーム63試合における入場者内訳(人)

宿泊客

225,694

日帰り客

1,278,934

合計

1,504,629

	入場者の消費支出総額(円)
宿泊客	8,237,166,692
日帰り客	9,592,009,875
合計	17,829,176,567

# 波及効果の算出

これらの前提条件と平成27年新潟県経済関連表経済波及効果分析ツールを使用して経済波及効果を算出する。

※ツールに入力する値は福島ホープスの経済波及効果についてを参照

[http://fkeizai.in.arena.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/01/cyousa\\_2015\\_05\\_2.pdf](http://fkeizai.in.arena.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/01/cyousa_2015_05_2.pdf)

新規需要額	(百万円)	33,125
県内需要額 (=直接効果)	(百万円)	20,146
消費転換率		0.602897

# 分析結果

		直接効果	1次間接波及効果	2次間接波及効果	総合効果
生産誘発額 (=経済波及効果)	(百万円)	20,146	6,651	4,027	30,824
	粗付加価値誘発額	10,522	3,842	2,679	17,043
	雇用者所得誘発額	5,652	1,795	923	8,371
波及効果倍率	(倍)				
	生産誘発額 (合計) ÷ 新規需要額	0.93			
	生産誘発額 (合計) ÷ 県内需要額	1.53			
雇用誘発数	(人)	2,549			

# 分析結果

以上の分析結果から、生産誘発額が308億2400万円、粗付加価値誘発額が170億4300万円、雇用所得誘発額が83億7100万円と推計される。

約308億円の経済波及効果は地域の活性化やその他の産業に大きな利益をもたらす。

よって球団設立は経済波及効果を見れば可能であるといえる。

# 参考文献

- ベースボールマガジン（ベースボール・マガジン社）  
→創刊号（1946）、1950年7月号、1950年12月号、1951年4月号、1954年2月号
- 野球界（博友社）→1950年12月号、1954年10月号、1956年4月号
- ホームラン(東京ホームラン社)→1950年2月号、1950年9月号、1950年10月号
- ベースボールニュース（東京ホームラン社）→1950年1月号
- 読売スポーツ（読売新聞社）→1950年5月号、1950年7月号
- 焦土の野球連盟（阿部牧郎著 サンケイ出版 1987）
- 激動の昭和スポーツ史① プロ野球上（ベースボール・マガジン社 1989）

- 最弱球団 高橋ユニオンズの青春記（長谷川昌一 白夜書房 2011）
- 二軍史 もう一つのプロ野球（松井正著 啓文社書房 2017）
- 羽ばたいた駒鳥たち 松竹ロビンス 1936～1952 個性派球団興亡史 野球雲Vol.10（啓文社書房 2017）
- 無名の開幕投手 高橋ユニオンズのエース 滝良彦の軌跡（佐藤啓著 桜山社 2020）
- 日本プロ野球「経営」全史 球団オーナー55社の興亡（中川右介著 日本実業出版社 2021）
- 消えた球団 1950年の西日本パイレーツ（塩田芳久著 ビジネス社 2021）
- ユニオンズ戦記 1954/Kと球閑喋、幻のプロ野球チーム高橋球団の記録（川島卓也著 彩流社 2022）

- 福島ホープスの経済波及効果について [http://fkeizai.in.arena.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/01/cyousa\\_2015\\_05\\_2.pdf](http://fkeizai.in.arena.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/01/cyousa_2015_05_2.pdf)
- 東北楽天ゴールデンイーグルスの経済効果について(宮城県震災復興・企画部 震災復興・企画総務課) <https://www.pref.miyagi.jp/documents/5878/609801.pdf>
- 平成 27 年（2015 年）新潟県産業連関表 経済波及効果分析ツールの手引き(令和 3 年 2 月 新潟県総務管理部統計課) <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/252435.pdf>
- 2022年度 JERA セントラル・リーグ公式戦 試合日程補足説明 [https://npb.jp/games/2022/schedule\\_note\\_cl.html](https://npb.jp/games/2022/schedule_note_cl.html)
- 野球の経済学(小林至著 新星出版社 2022)